

大学での共修授業におけるメタ認知と批判的思考の養成

小林由子 (北海道大学)

キーワード：メタ認知，批判的思考，共修授業

問題と目的

本発表の目的は、メタ認知と批判的思考の養成を目的とした大学における共修授業の実践について、学習内容と受講者からのフィードバックにより検討することである。

「共修授業」とは、日本人学生と留学生がともに学ぶ授業を指す。本実践では、授業で使用する言語は日本語とし、日本語能力が中級以上である留学生を対象としている。「中級」の日本語能力とは、判断基準のひとつである OPI (Oral Proficiency Interview) では、文単位での発話が可能であり、身近で具体的な事項については話することができるが、段落単位のもつた発話や抽象的な話題は不得意なレベルである。

共修授業については日本語教育・留学生教育の分野で様々な試みがなされている (末松ほか (編著), 2019 など)。しかし、教育心理学との関連づけは未だ十分ではない。

本実践ではグループワークを中心とした授業を通じて、メタ認知について知り多様な視点から考えることができる批判的思考力を身につけることを目指している。「多文化・異文化に関する知識の理解」「コミュニケーションスキル」「情報リテラシー」「論理的思考力」「問題解決力」は中央教育審議会の「21 世紀型市民としての学士力」にも挙げられており、大学で育成すべきスキルである。

日本人大学生と留学生の共修授業では、参加者が多文化・異文化に属することが可視化されており、日本人学生・留学生ともに交流に対する動機づけが高いことから、対話を通じて上記のスキルを養うことが期待できる。

しかしながら、日本語能力が中級の留学生が参加しているため、内容をいかに具体化し理解可能にするかを考慮に入れつつ、グループワークをファシリテートしていかなければならない。

方 法

調査対象者

調査に同意した授業参加者 16 名 (日本人大学生・留学生各 8 名)。

授業方法

トピック毎に、授業前にディスカッションの題材の提示をしておき、導入的なグループワークと講義、トピックについてのグループディスカッション、グループディスカッションの結果のシェア、

補足的な講義、課題の提出という流れで行った。グループは 3~4 名で必ず日本人学生と留学生が混在している。

設定したトピックは「メタ認知の重要性」「聴き手や読み手を考える」「スキーマとステレオタイプ」「ジンクス」「フェイクニュース」「認知バイアス」「論理の勘違い」「レポートの書き方 (論拠により問いと答えを合わせ一貫したレポートを書く)」「身近な問題について考える」などである。

データ

授業毎の学生のコメントシート (大福帳)、授業終了後のアンケートおよびインタビューにより分析を行った。

結果と考察

授業終了後の 5 件法での評価では、「グループワークで自分で発見ができた」 $M=4.43$ $SD=0.49$, 「他の人の意見をよく聞き、違う考え方を知ることができた」 $M=4.71$ $SD=0.45$, 「いろいろな言語や文化、価値観について考えることができた」 $M=4.71$ $SD=0.45$, 「他の人の話を聞いたり他の人が書いたものを読むときに考えることができるようになった」 $M=4.36$ $SD=0.48$, 「人間がやってしまうことが多い『認知バイアス』について理解した」 $M=4.64$ $SD=0.48$, 「これから、より深く考えることができるようになると思う」 $M=4.71$ $SD=0.45$ と、おおむね高い評価を得た。授業目標はある程度達成できたといえる。

日本人学生と留学生の差、留学生の日本語力による差は見られなかった。終了後のコメントは日本人学生・留学生とも日本語使用に関するものが多かったが、授業毎のコメントシートでは授業内容についてのふりかえりが多く見られた。

共修授業では文化差や言語差が可視化されているが、日本人のみのクラスでも、背景の差を意識化できれば、同様の実践は可能と考えられる。

引用文献

末松和子ほか (編著) (2019). 国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ 東信堂

付 記

本発表は科学研究費補助金 (課題番号: 19H01276) の助成を受けている。